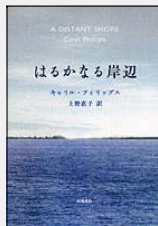


キャリル・フィリップス 作
上野直子 訳

『はるかなる岸辺』



時空雑多な過去を背負う折り合いのつかぬ人々

ポストコロニアルの文学と言うと、インドでは旧宗主国の前に微塵も動じないクシュワント・シン、分離独立を小説に構築するヴィクラム・セートやロヒントン・ミストリー、カリブ海では自分の生涯に読者を巻き込む名手 V・S・ナイポール、と世代ごとに大仰な活劇をものする作家たちがいて、面白さとは裏腹に、アジアから英語圏を覗く日本の読者にはすぐに等身大の作中人物が浮かばないかに見える。時間をかけ自分なりのイギリス文学見取り図をつくりながらも世の中にそこで処理しきれぬ問題のあることに苛立つ人々からは、「ポストコロ」と呼ばれたり、ある種の剽軽な人々からは「ポコ」と呼ばれたり、日本語の音の雰囲気にすぎないのだが、形容の仕方もぶれる。

評者は、たとえば、ロンドンのオックスフォード・ストリートあたりを歩いていると人種多様でとても楽だが、郊外に出る

と、アジアからの東の間の客を差別する人も時にはいるといった単純な事実の確認こそ、ポストコロニアルという問題性の入口と考える。本書はその入口の向こうに限りなく深刻な問題があることをわかりやすく伝える。

ドロシー・ジョーンズは人種的偏見の強い父を持ち、自らはマンチェスター大学を出て総合高校などの音楽教員をしていたが、比較的小さな事情から早期退職を選び、両親との死別、夫ブライアンとの別離などから、今は精神科医の治療を受けている。イングランド生え抜きの住人がすでに相当傷ついている。そこにヴォランティアで車を運転するアフリカ出身のソロモンという人物が現れ、車に乗せてもらう。ドロシーがその過去を気にかけて出したところ、ソロモンは住人から脅迫状を受け取る。

物語は倒序法で進行し、作者はドロシーの両親、妹シーラ、ソロモン、雑貨屋のマハムード、バーミンガム出身の元夫ブライアン、臨時採用の教員ジェフなど、ひとりひとりの過去を丹念に遡る。人々の時空雑多な過去がこの小説特有の複雑な時間関係を背景に明らかになったところで幕。

だが作品を読んでいると作者の時間操作が一向に気にならず、むしろ内容の要求する自然の形式と見えてくる。このようにしか書けなかったのではないかと。考えてもみよ。現実でも、いつの間にか自分の周りにはいる人物たちについてわれわれが何を知っているというのか。人の未来はわからぬとしても、過去すらもわからない。時折、時間を飛ばしたかたちで、その断片がわかるのみ。それも虚構かもしれぬ。この小説はそういう具合に書かれている点で妙にリアルだ。訳者は作家フィリップスがたえず「どこから来たのか」と問われてきたという話を紹介する。この問いこそ自分の周りの人々に対しわれわれが抱

く最も俗っぽい疑問だ。作者はだれにも共通する高尚とは言えぬこの好奇心をくすぐりながら、偉人でも英雄でもない人々の過去を少しずつ読者に差し出す。等身大と冒頭で述べたのは、かれらが今のイングランドの、そしてどこの国にでもいそうな人々だからだ。

ポストコロニアルの文学は、今、宗主国との対峙、独立後の近代化といった大枠のテーマをひとまず背景におしとどめ、国と国のぶつかり合いではなく、個人と個人のぶつかり合いを前景化する。作品は、作中人物の身の回り、その住む町、せいぜいマンチェスターやバーミンガムで成立している。アジア人の評者がことさら引用するのも妙だが「イングランドが変わった」からだ。するとイングランドの文学受容も変わらざるを得ない。

訳者はポストコロニアルの文学のみに傾注するのではなく、加えてそれ以前の文学にも通じ、ふたつながらを拮抗させつつ訳文を作っている。ドロシーのイングランド性を「矜持」や「助け舟」という訳語に凝縮し、新しい文学のダイナミズムを「ぼちぼち」と戯けた副詞に込める。来日し聴衆の疑問に丁寧に答えたあの体軀屈強の作家の紡ぐ絶妙の言葉が、スピード感のある日本語に置き換えられていて、一晩で読み通せた。(岩波書店、2011年10月、四六判398頁、3,600円)

—— 榎 正行 (中京大学教授)